

「ヴィアレブ持続皮下注」の勉強会に参加しました

大垣院長が12月15日(月)に開催されたパーキンソン病の新しい治療法である「ヴィアレブ持続皮下注」の勉強会に参加しました。

この勉強会では、実際にこの治療を多くの患者さんに行っている脳神経内科の第一人者である魚住 武則 先生から、直接お話をうかがうことができました。

●なぜ新しい治療法ができたのか

パーキンソン病の治療では、飲み薬が基本ですが、病気が進むと次のような悩みが出てくることがあります。

- 薬が切れてしまう時間(ウェアリングオフ):飲み薬を飲んでも、次の薬までの間に体が動かしにくくなってしまう
- 体が動きすぎてしまう時間(ジスキネジア):薬が聞きすぎると、体がくねくねと勝手に動いてしまう。

ヴィアレブ持続皮下注は、ウェアリングオフやジスキネジアを減らし、安定した状態を長く保つことを目的としています。



●ヴィアレブ持続皮下注の実際

これは、小さな機械(約300g)を使って、薬液を1日中、途切れることなく少量ずつ皮下に送り続ける治療法です。これにより、体内の薬の濃度が一定に保たれ、ウェアリングオフやジスキネジアを減らすことが期待されます。

なお、この治療を始める目安は、「5-2-1」と言われています。



- ・ レボドバ(ドーパミンを補充する内服治療)を、1日**5回以上**も内服する
- ・ オフになる時間(ウェアリングオフが起きてしまう時間)が、1日に**2時間以上**ある
- ・ ジスキネジアが、1日に**1時間以上**ある

●在宅でのサポートについて

ヴィアレブ持続皮下注は、脳神経内科の専門医が始めますが、ご自宅での毎日の管理は訪問看護さんがサポートしてくれます。

- 針について:皮膚に残るのは、柔らかい樹脂製の細い管で、安全です。
- 入浴について:お風呂に入る時は、ルートを外して専用のキャップをつけます。

当院では、この新しい治療法を受けている患者さんや、今後この治療を検討される患者さんが、ご自宅で安心した生活を送られるよう、病院や訪問看護さんと協力して、しっかりとサポートしてまいります。お気軽にご相談いただければ幸いです。